

# ブラジル人親子支援プログラムの有効性についての一考察 NO.2

長谷部和子・杉山喜美恵・高山育子\*

## 1. 今年度の報告事項

2008年度の「ブラジル人親子支援プログラム No.1」で報告した実施内容についての反省や要望に基づき、2009年度は、親へは日本語講座とパソコン講座を開催した。

その間、子どもたちは学生たちと交流し、最後の第4回目に親と教員による懇話会を持つという内容に一部変更・改善を加え実施した。参加学生の中には2年連続でブラジル人親子に接し、学生の育ちにはっきりとした成長が見られた。親子とも日本の小学校に入学する前の心構えなど日本のシステムに早く慣れるために何が必要か探ることもできた。

今回は学生へのアンケート調査（質問は別紙参照・回答結果は最後に掲載）を実施し、その中から、より深く関わりを持った学生の中から数人を選び、聞き取り調査も行った。

## 2. ブラジル人親子支援プログラムの概要

### (1) 実施日時・人数：

各回とも日曜日、13：30～16：00

- ①平成21年12月13日、②平成22年1月10日、③1月24日（地元新聞に活動掲載）  
④2月7日



「中日新聞・1月24日実施内容」の掲載記事

(2) のべ参加人数： 205 人

組数：40 組

外国籍大人：62 人、子ども：72 人 学生ボランティア：53 人、教員：26 人、通訳：2 人（4 回出）、講師：2 名（4 回出）、他 1 名（2 回出・公立小学校ブラジル人学級教員）

### (3) 実施場所：

本学 情報館、保育実習室「あそびの森」他

### (4) 事業の具体的内容

親は日本語教室とパソコン講座に分かれ学習し、後に懇話会に参加。

子どもたちは「あそびの森」で学生たちと日本の伝統的な遊びや絵本読みなどで交流した。

#### ① 日本語講座：

第1・2回「求人票の見方」、「履歴書の書き方」と就業関係、

第3・4回：「日本の小学校の行事」、「緊急時の学校・保育所への電話のかけ方」

#### ② パソコン講座

グラフ作りやホームページの作成方法

表1（のべ人数）日本語／パソコン講座参加者数

日程	① 12/13	② 1/10	③ 1/24	④ 2/7	計
日本語	9	16	14	19	58
パソコン	1	1	1	1	4
計	10	17	15	20	62

\*東海学院大学

表2. 日本語講座の回数別出席者

	1回	2回	3回	4回
人数	14	2	8	4



写真① パソコン講座



写真② 日本語講座



写真③ 日本語講座

## (3) 保護者対象講座

2008年度のブラジル人親子支援プログラムは3回実施されたが、親の不安を軽減させることが子どもたちを安定させることに通じると考え、毎回、親子であそんだ後、親子分離の時間を設け、保護者に対して懇話会を行った。

プログラム参加者は、来日したばかりの人から滞日18年という人もおり、日本語の会話能力はさまざまであった。なかには日本語で運転免許を取得したという人もいたが、滞日年数や子どもを日本の小学校や保育所に通わせている割には日常会話があまり上手ではない人が多かった。

また、昨年度に引き続き参加した「リピーター」は、子どもがとても楽しんだという理由で今年度も参加していた。リピーターの中には「勉強」と聞いて尻込みする人もいた。しかし、日本語講座の講義が始まると熱心にメモを取る姿がみられ、懇話会では「とても役に立った」、「子どもがいないと参加できないけれど、子どもがいらない友人も受講できるようにして欲しい」という感想を聞くことができ、好評であった。

日本語講座の講師は日本語教師の資格を持つ日本人で、講師が用意した資料にもとづいて、ポルトガル語の通訳を介しながら講義を行った。また、参加者の関心や要望をできるだけ取り入れるようにし、回を重ねるにつれて単語の意味や読み方だけでなく、発音練習や会話の役割練習を増やしていった。第3、4回は公立小学校でブラジル人子弟の「取り出しクラス」を担当している現役の小学校教諭が「教師役」として加わり、より臨場感のある役割練習を行った(写真②・③)。

当初、4回の講座は同じメンバーに対して連続して行うことを想定していたが、実際に開催してみると、日本語講座においては、4回とも出席したのは、4名であった。講座に対して連続的に出席していただくことは、難しいと感じた。したがって次回は、その回だけ出席しても理解できるよう、1回で完結する形式がよいと思われる。

後述される懇話会では日本語講座に対して回数が少ないという意見もだされたが、語学習得のための講座は、やはり連続して出席することが望ましい。連続して出席してもらうためにはどのような配慮が必要か振り返り、次の講座に役立てていきたい。

日本語を勉強して、日本での生活が暮らしやすくなると、ブラジルに帰る気持ちがなくなるかもしれない、とか子どもたちが日本語を上手に話せるようになり、日本の学校に慣れ親しんでくると、私たちは子どもが大きくなるまで日本に居なければならなくなるのでそれは困る、というような考え方を持っているブラジル人も少なくない。この考え方は、自分たちだけでなく子どもたちが必ずしも日本語を上手く話せるようになる必要はないと言い、いずれはブラジルに帰国するという意思の表れである。

パソコン講座は講師（当学の非常勤講師）と受講者1名のマンツーマンであり、受講者のスキルと希望に応じてワード、エクセル、ホームページ閲覧などパソコンの操作方法について行なった（写真①）。

この参加者は、4回とも出席であった。昨年度の懇話会で出された「就職に直結した支援」として一番に考えられたのがパソコン講座であった。しかし、実際には参加希望者が少数であったのは何故か分析が必要であろう。我々が考える「支援」と彼らが望んでいる「支援」に違いがあるのかもしれない。あるいは、日本人の感覚で講座を組み立てているのではないか。それらのことを1つ1つ検証しながら彼らが参加しやすい講座の形にしていきたい。



写真④ 遊びの様子



写真⑤ 遊びの様子



写真⑥ 折り紙を教える様子



### 3. 実践のふりかえり

#### (1) 「学びの場」としての評価と反省

昨年度と同じく多くのブラジル人親子が参加しやすい休日の日曜日に開催した。しかし、学生にとっては課外活動となるため、義務で参加させるか、有志を募るかで迷った。出席を義務づければ、多くの学生がブラジル人親子と接し、多文化共生について考えるよい機会となるが、一方で、学生の主体性が芽生えにくいという問題点がある。今年度は参加できる日時に1回以上参加するよう学生に促した。2年生のほとんどが、昨年参加していて、自ら積極的に参加した学生も数人いた。

ブラジル人親子の参加者はブラジル人通訳Xさんを通じて募った結果、参加した子どもは小学生が中心となり、上は中学生もいた。これは何かを行う場合に家族で行動することが多いため、当初予定していた就学前の子どもを対象としたプログラム内容を実施することができず、また、対象年齢を絞った活動を行なうことも難しくなってしまった。特に2年目ということで、多くの方々にも親しみを持って参加する傾向があり、中学生たちが友達を誘って参加していて、次回は対象を絞る必要を感じた。

#### (2) 「学生の学び」についての評価と反省

学生の学びを知るために、アンケート調査を実施した。プログラムに参加した学生30名(1年:15名、2年15名)に8項目尋ねてみた。

岐阜県の集住都市会議のメンバー市に将来就職する可能性のある学生に、ブラジル人親子に接する経験が必要であることを説明し、参加を促した。そのため、講義の一環として参加したという学生が全体の19名であった。

これまでに日系ブラジル人と関わった経験がある学生は23名で、彼らの状況について知っているか、と言う質問に対して知っている学生が17名、残りの学生は知らないと答えた。

このプログラムに参加して、とても面白かった、あるいは面白かったと回答した学生は全員であった。昨年度のプログラムに参加した学生はほぼ半数で、去年と比較して良くなった、あ



写真⑦ 紙鉄砲を作る様子



写真⑧ 支援物資を探す様子



写真⑨ 生活支援物資を探す姉妹

るいは変化無しと回答した学生は12名で、あとは回答無しであった。

昨年との大きな変化は、昨年の実施後ポルトガル語の勉強をしたという学生が4名いた。また、2年間プログラムに参加して、「日系ブラジル人であれ日本人であれ、子どもと接することに違いは無く大いに役立った」と回答した学生が7名いたことである。

学生にとって一番の学びは、「子どもに言葉や文化の壁はない。一緒に遊べて楽しかった!!」ということにつきる。子どもたちとの言葉や文化の壁を乗り越えて、積極的に関わり、楽しく遊ぶことができる学生のたくましさを感じる。また、日系ブラジル人の子どもとの関わりを子ども一般に応用する力も感じられる。さらに、外国籍の子どもに対する偏見を持たないという点では高く評価できる。去年の反省から、子どもたちへの「言葉かけ」を自分なりに考えて接していた学生がいた(写真④・⑤・⑥)。

更に、聞き取り調査の中で、初めて参加した去年は「不安が多く、ブラジル人の子どもたちに慣れるのに時間がかかったが、今年は何回かの実習の後で、その経験もあったので、全く不安も感じないで接することができた。」などという感想を述べる学生も見られた。一方、日本人の子どもとの違いは違いとして認識しており、身振り手振りを大きくする、目を見て話をする、笑顔で接するなどジェスチャーや表情などに工夫し、言葉を介さないコミュニケーションの有効性や大切さも学んでいる。短い時間のあいだに遊びを通じて参加者と仲良くなるプロセスが明確であり、このあたりに「楽しさ」を感じているのではないだろうか。

今回、学生の中に中学校時代に授業の「総合学習」でポルトガル語を勉強した経験を持つ学生がいて、簡単な単語は使っていた。多くブラジル人が居住する地域の小学校や中学校ではポルトガル語の授業が設けられても良いのではないかと感じた。

### (3) 懇話会

昨年度の振り返りより、懇話会が参加者と我々との意見交換の場として非常に有効で

あったことを受けて、今年度も懇話会を行った。

ただし、今年度は保護者対象講座を設けたため、毎回、懇話会を行うことは難しかった。したがって、最終回に講座の振り返りも含めて懇話会を設定した。

懇話会は日本語の習得度に応じて3グループにわけた。通訳が2名であるため、2つのグループはあまり日本語が得意でない人を主とし、通訳が1名ずつ入った。また、昨年度は子育てに対する悩みを聞くことが主目的であったため、元幼稚園園長などがファシリテータとして参加したが、今年度は講座に対する感想や我々に行ってほしい支援について情報を得たいと考え、講座の実施者(長谷部・高山・杉山)がそれぞれのグループに入り司会を務めた。さらに、日本語講座、パソコン講座の各講師、前述の小学校教員も参加した(写真⑩)。



写真⑩ 懇話会の様子

保護者対象講座を実施したことについてはどのグループもよい評価であったが、回数をもっと多く行ってほしいという意見が多かった。内容については、日本語の正しい話し方、使い方がわかったことを評価していた。

杉山が担当したグループでは、小学校教員が参加していたことで、より具体的にブラジルと日本の違いを認識することができた。

「何を覚えたいですか?」という質問に参加者の1人から「役場」という答えがでた。それに対し、「ああ、役場ねえ……。健康保健の申請とか補助金の申請とか。医療補助の申請とか。それが何の訳もないんだよね。」と小学校教員が納得したように言ったことばが非常に

印象的であった。確かに役場での申請は日本人にとっても煩雑で難しいと感ずることがある。彼らはそのような場面で困難さを感じていることがわかった。

また病院については、以下のようなやりとりがなされた。

参加者：たとえば、先生が、おなかの先生、わからないね。耳の先生、わからないね。

教 員：どこに行けばいいのかわからない。たしかに・・・

司会者：各専門のところ・・・個人病院？

教 員：ブラジルっておっきい病院がほんとあって、そういうなんとか耳鼻科とかではないんだそうです。だからまずおっきいとこほんとといってさがせるんだそうです。けどここの辺は特に耳鼻科とか眼科とか・・・ちっちゃいところがぼんぼんぼんぼん……。おっきいびょういんいくとわからないし。

司会者：おっきい病院でいきますか？

教 員：T 病院？ ああ。でも何にもわかんないもんね。

参加者：そうそうそうそう・・・漢字、何にもわからない・・・

教 員：それをたずねる場所もない 訳してくれる人がいない。たとえばおなかの痛い時、どこへいっていいかわからない。それきくともないのね。電話で。急にどうしようってときに。日本人は救急センターあるんだけどね。夜の急病、どこへ電話かけていいかわからないし、ことばが通じないから誰に電話していいかわからない。土日ものどんなときも E 先生に電話をかけます。

参加者：E 先生、助けてください（電話をかけるしぐさをしながら）。――（笑）――

参加者：私の子どもね、血の検査、しました。先週ね、でも先生のお話、ぜんぜんわからない。これもだめ、あれもだめ、でもわからない。ほんとに心配です。

教 員：なんにもわからないねえ

参加者：紙だけ・・・

以上のやりとりはブラジルの人たちが自国との違いにとまどいながら、どうしてよいかわからない非常にせっぱつまった状況にしていることを示している。我々の支援がどのようなものであるべきなのか示唆を与えるものでもある。

学校については、ブラジルでは落第制であるため、その学年の学習内容を理解しないと上の学年にはあがれない。しかし、日本では 1 年間終わればたいてい学年があがっていくので、自分の子どもは学年の学習項目をすべて理解していると思っているのではないかと教員が危惧していることが教員からの質問でわかった。

また、割り算をはじめ、日本とブラジルではやり方が違うので子どもが混乱しており、それに対する親の気持ちも聞くことができた。

教 員：ブラジルの算数と日本の算数はすごく違うんですか？

参加者：考え方がちがうね。基本が違う。

参加者：九九ない

参加者：ほんとに違う

教 員：割り算の仕方も反対だしね。

参加者：だから頭、混乱してしまう。

教 員：それに慣れるのが・・・うちの人もこっちで慣れてるので。

教 員：これは一緒？この筆算。筆算はある？

参加者：答えだけ同じ。でもちょっとちがうね。

教 員：5のかたまりとか、10のかたまりとなくて数える・・・

参加者：そうそう。1、2、（指をおって数える）・・・（爆笑）

教 員：日本はたとえば  $8 + 6$  だったら、さくらんぼ算とかおかあさん聞いたことある？こ（う）やって 14。こういう考え方はないんですよ。

参加者：1、2、3、4、5 となっとなっ、数える・・・

参加者：子どもかわいそ。頭はばらばら

教 員：でも、これ、早いんだよ

参加者：日本は早いんです。でもあたまぐちゃぐちゃ。ほんとにかわいそ。

このやりとりから日本とブラジルの数に対す



る考え方の違いがよくわかる。筆算や数の捉え方は基本的なものであり、それは日常生活の中で使用することも多いため比較的低年齢で習得し、定着するものである。定着してしまっている親が子どもに教えることが非常に困難であることは容易に推察される。

また、日本では体操服、習字道具など持ち物が多くてわからないという親の思いも聞くことができた。

杉山のグループは通訳が参加していないため比較的滞在期間が長く日本語ができる参加者が多いのだがそれでも「日本での学校生活にはわからないことが多い」状況であることがわかった。

他のグループで話した話題としては、「ポ日辞典は古くて、掲載されている日本語の単語はほとんど現在では使われていないものであったりして役立たない。新しい辞典は高価で手入れにくい」という話も出て日常場面で使える会話練習の需要がうかがわれた。

#### 4. 今後の課題と展望

保護者対象の講座については、言葉を習得する機会として、月1回ペース計4回では少なすぎるが、保護者は単に子どもの付き添いではなく、子育ての主体として私たち主催者側の直接的な対象であることを明確にできたことと、直接関わることができたという点において、意義深いものであったと思う。また、日常の生活場面で必要とされる日本語会話の役割練習のおかげで、参加者、講師、通訳、主催者のあいだに打ち解けた雰囲気が作られたのもよいことであった。

懇話会では、保護者たちがどのようなことに困っているかという生の声を聞くことができたことは今後の支援内容を考えていく上で非常に有効であったと考えられる。

お互い「カタコト」ではあるが、向き合って話すことができたことは有意義であった。

2年目のプログラムとしてはまずまずの成果と評価できる。2010年度は、学生がより自覚的に学べるように、グループ活動と外国籍の親による子育て支援エピソードを日本語で発表する、コンテストを予定している。今までのプログラムを通じて、学生と子どもたちが制作活動や作文作成（ポ・日）などを共同して行ない、親側からは子育て苦労話などそれぞれ発表する場を設けることで、相互のコミュニケーションを深めたい。

岐阜県においての外国籍人口の中で20～30代の占める割合は突出している。外国籍の子どもたちを学生たちが就職後、保育士として接する機会は非常に多くなることは明らかであり、地域住民との共生という意味合いでもそれぞれに深い理解が必要である。ボランティアとして、更に多くの地域住民の参加も募り、相互理解を進めたいと考えている。

現在、日本人親子と外国籍親子は全く別々に「あそびの森」での親子遊びを実施してきたが、今後それぞれ単独に実施する場と双方ミックスで開催する場を持ち、その中で学生の動き、親子の動き等を比較することによって双方の育児に対する同質と異質な部分が明確に出てくるのではないかと考える。

プログラムの中に日本人と外国籍の子どもたち、そして学生らが、自然の残る広場で一緒に行うサッカー遊び等が実施できれば、外国籍の子どもたちの持つ力強さと日本人の子どもたちの持つ緻密さが子どもたち双方に影響し合えば双方の弱点である「逞しい・生きる力」を補い合うことになり、学生の育ちにもつながる。